

Potential utility of bereavement life review for depression and spiritual well-being of bereaved family members in home care: Contents of narratives

在宅で家族を看取った遺族の抑うつ感とスピリチュアリティに及ぼす ビリーブメント・ライフレビューの有用可能性と語りの内容

安藤満代 聖マリア学院大学 看護学部

本研究の目的は、終末期の家族を在宅で介護した方への心理的介入としてのビリーブメント・ライフレビューの有用可能性と、介入での語りの内容を調べることであった。参加者は2週間の間に2回の面接があるというこの介入を受けた7名の遺族であり、スピリチュアリティと抑うつ感を測定するためのFACIT-SpとBDI-IIの質問紙に回答した。語りの内容は質的に分析された。介入後には、FACIT-Spの得点は有意に上昇し、BDI-IIの得点は低下した。語りの内容分析から、【最も大切なもの】としては「人間関係」や「他者への感謝」が、【故人の思い出】としては「故人の性格や好み」や「旅行の思い出」が抽出された。【在宅での介護のときの思い出】としては「患者の希望の実現」や「後悔」が、【介護を通しての自己の変化】としては「独立心と1人で生きる準備」や「在宅介護の経験を活かすこと」が抽出された。これらの結果から、ビリーブメント・ライフレビューはスピリチュアリティの上昇と、抑うつ感の低下に有用である可能性が示唆された。

キーワード: 遺族, 在宅介護, 抑うつ感, スピリチュアリティ, ライフレビュー
